EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

えど友

EDO-TOMO

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

No.41
2008
（平成20年）
1－2

江戸東京博物館友の会会報

目次

新春特集“お正月　みかん召しませ　双六遊び”…… 1
新年祝辞（竹内館長／玉木会長）…… 3
友の会セミナー『一画家から見た漱石の気になる生き方』… 4
友の会セミナー『時の鐘と江戸のくらし』…… 5
特別観覧会『北斎―ヨーロッパを魅了した江戸の絵師―』… 6
江戸博クリップ『ちびた眉墨』…… 6
見学会『水戸徳川家ゆかりの地を探訪』…… 7
見学会『江戸城周辺の探訪―その2』…… 8
見学会『深川の史跡―その1』…… 9
えど友プラザ『長谷川伸さんのお墓』…… 10
会議・会合日誌…… 10
サークルだより…… 11
催事案内…… 11
会員優待のお知らせ…… 12

新春特集

お正月 みかん召しませ　双六遊び

江戸東京博物館　学芸員岩城紀子

新年あけましておめでとうございます。お正月といえば昔なつかしい双六遊びに造詣の深い、学芸員の岩城紀子さんに歴史的なお話を交えてお書きいただきました。

式亭三馬のお年玉

乍畏御禮口上益御機嫌克被為遊御座、恐悦至極奉存候。随而私店、諸国御贔屓之御蔭を以て、去年類焼後普請ニ取掛り候処、此度は見世土蔵ニ可拵旨、御勧に従ひ御加勢を以て土蔵成就仕候段、偏に厚き御贔屓之御餘光と、難有事身にあまる朝夕奉拝謝候。猶、御得意様方御厚情にて只今小包を御用ありしも、今からハ大包を申付に、前後の普請ものいりを助て遣はせと恵せられ、以前よりも二増倍之御用被仰付、冥加至極、難有仕合奉存候。右御礼乃為、当巳三月普請成就売初仕新作ゑさうし景物に奉差上候。右定日追々御披露申上候。御賑々敷御用之程、奉希候。以上

『浮世風呂』『浮世床』など、江戸庶民の日常をたくみに描いた作品で知られる戯作（げさく）者、式亭三馬は、日本橋本町二丁目に薬屋「式亭正鋪」を営む実業家でもあった。文化7年(1810)に開店したこの店では、翌年売り出した化粧水「江戸の水」が大変な評判を呼び、たちまち人気商品となり、偽物が出回るほどであったという。その他、解毒薬の「金勢丸」などの薬や、煙草入れ、香など様々な商品を取り扱っていた。人気戯作者であるだけに、自分の店の宣伝などはお手の物。当時は多くの商店で、新年の初売りや新装開店の際に、得意客にちょっとした配り物をしていたが、三馬の店では、三馬自身の手になる景物本や双六（すごろく）が、いわば書き下ろしの限定版として配られた。冒頭の口上は、そうした三馬の店のオリジナル双六、「御贔屓（ごひいきの）御利益（ごりやく）初賣（はつうり）之迎福神（ふくのかみ）　以御蔭（おんかげをもって）出世雙六（しゅっせすごろく）　全」に、新年を迎えての店主あいさつとして記されたものである。

この口上をみると、三馬の店は前年に火事で類焼しており、お得意様のおかげで無事建て替えに着手でき、なお

開花春美人寿語六　楊州周延／画。
館蔵 91200032

かつ土蔵造りとすることができた、この年の3月に予定している新装開店にあたっては新作の絵草紙を景物として配るので、追ってまたオープンの日をお知らせするから楽しみに待っていてほしい、といった内容となっている。

双六中には「のし　御年玉　賣物ニハ不仕　御目印“まさる”江戸本町二丁目北カハ中程　白きのうれんくすりみせ　式亭三馬店」との詞書きも見られ、正月の非売品の「お年玉」として作られたものであることがわかる。三馬の店は、開店当初、本町二丁目南側

にあったが、文化14年(1817)以降、本町二丁目北側中程に移転している。この双六では所在地が「江戸本町二丁目北カハ中程」となっているため、文化14年(1817)以降に作られた物と判断していいだろう。あるいは、この時の火災が、移転のきっかけだったのかもしれない。

三馬は、自店の商品の広告・宣伝はもちろんのこと、他からの依頼も受け、引札や広告双六も手がけており、今で言う「コピーライター」のような仕事も請け負っていた。三馬の晩年以降に活躍した戯作者の滝亭鯉丈も三馬同様、依頼を受けて制作している。こうした広告双六の絵を描いたのは、いずれも当代人気の絵師たちであり、店先の情景を振り出しに描いて、商品を螺旋状に左回りに配列する形式が、広告双六の定番であったようだ。初売りのめでたさを一層引き立たせたこうした「オリジナル」双六は、正月の江戸の、風物詩のひとつであった。

お正月は、みんなで双六

さて、お正月の遊びといえば、読者諸氏は何を思い浮かべるであろう。羽子板、凧揚げとともに、ちょっと前の時代なら、必ず「双六」の名をあげたのではないだろうか。

「すごろく」の名を持つ遊戯が2種類ある、ということは、すでに広く知られていることである。一つは、中央を境に左右がそれぞれ12の桝目で区切られた、雙六盤と呼ばれる長方体の盤を用いて、2人で競う遊戯である。そしてもう一方が、絵双六、一枚の紙に描かれた複数の桝目を、振りだしから上がりまで駒を進めて競う遊戯である。双方の歴史を比べてみると、盤雙六のほうが圧倒的に古く、文献や絵画などから、7世紀の末には既に日本でもかなり普及していたと考えられる。そうしたことから、従来、同じ名を持つ絵双六は、先にあった盤雙六から変化したもの、といわれてきたが、近年では、両者は別系統の遊戯であり、何らかの理由で名称のみが同一となったと考えられている。いずれの遊戯も、日本固有のものではなく、起源に関してはエジプトやチベット、中国大陸など、未だに諸説混在し、日本への伝播も含め、明確なことは不明である。

浮世道中膝栗毛滑稽雙六　歌川広重／画。
館蔵 90204693

絵双六の最初のものとして、日本の記録上はっきりと認められるのは、文明年間(1469～1486)の宮中の女官の日記『お湯殿の上の日記』に記された「浄土双六」である。現世を振り出しに、仏教の十界を巡り、極楽浄土を目指すこの双六は、当初、貴族ら限られた階層の人々の遊びとして広まったようだが、江戸時代に入り、庶民の遊戯としてかなり普及した。

> 天の岩戸のそのかみ、神すゞしめの風俗とて、九月の比日待をせしに、明難夜のなぐさみとて、小歌・浄瑠璃・物真似など、さまざまなる中に、人の心の善悪は、これで見る物ぢやと、浄土双六をうちけるに、やうちんへおつるも有、餓鬼道へゆくも有、一人は佛になりたるとて、よろこぶ所へ、「御膳を出します」といへば、おのおの座敷をつくる。佛をうちたる者もの、「おれは佛の居所へなほる」とて、上座をしめければ、口がしこき者のいふやう、「それならば、まづ喰ものは餓鬼道でしまひまする」と申して、ほとけには何もくはせぬ。(「百味の夜食浄土双六」『初音草噺大鑑』　寓言子／著　元禄11年(1698)刊)

開花春美人双六・袋
館蔵 91200302

この笑い話にあるように、遊びとはいえ、来世の自分の姿を占うという意味を強くもっていたため、日待・月待の時の、夜明かしの暇つぶしで賽を振る人が多かったようだ。しかし、遊びの流行り廃りは、人々の心の変化と歩調を合わせるもので、来世での幸せより、現世での楽しみを追い求める風潮にのって、やがて旅や名所を主題とした道中双六や、役者、化け物、福神を扱った物など、さまざまな絵双六が版行されるようになった。特に、お江戸日本橋を振り出しに、東海道の五十三次を順に巡り、京の都、三条大橋を目指す道中双六は、数ある双六の中でも、定番として人気が高く、出版の主流であった三都に限らず、全国各地に広がり、正月の、特に子供の室内遊戯として定着していった。

緒言に「元文寛保延享の比、世中の有様見覚え聞伝へたる有増を書侍る」とある『寛保延享　江府風俗志』は、そんな道中双六を、江戸の正月の遊びとして紹介した比較的早い文献である。

> 扨年季小供職人弟子抔の下ざまの遊びには、穴一抔する、是も師匠親方、松之内は大凡ゆるす心也、又道中双六、福人双六抔とて売歩行、娘子供は羽ねつき、手まり、針う

新年祝辞

江戸東京博物館　館長　竹内　誠

日頃から江戸博をしっかりと支えて下さっている「友の会」のみなさん、明けましておめでとうございます。いつも心温まるご支援に感謝いたしております。

お陰さまで本年3月28日に開館15周年を迎えます。初心を忘れず、みなさんに一層愛される、いきで楽しい「豊かな知恵の殿堂の江戸博」を目指して、頑張ります。今年もよろしくお願い申し上げます。

新年祝辞

江戸東京博物館友の会　会長　玉木達二

新年おめでとうございます。友の会にとって、昨年はまたとない飛躍の年であったと思います。会員数も1,450人に達し、どの催事にも数多くのご参加を頂きました。会員各位のご協力、博物館側の絶大なるご支援に厚く御礼申し上げます。

今年は「江戸東京博物館開館15周年」の記念の年にあたり、楽しい企画も盛り沢山のようです。友の会も充実した催物で呼応してまいります。みなさまの積極的なご参加をお待ちしています。

ち抔して遊びたわむれる

休みといえば、盆と正月、そのつかの間の休日に、江戸の町で道中双六に興じる年端もいかぬ年季奉公の丁稚（でっち）たちの姿が目に浮かぶ。「道中双六、福人双六抔とて売歩行」という記述は、これより約80年ほど後に著された『守貞漫稿』（喜田川季荘／著　天保8～嘉永6年(1837～53)成立）に次のようにある、双六売りの様子をすでに伝えている。

正月二日　今夜宝船の絵を枕下にしきて寝る也〔割註・略〕今世禁裡に用ひ玉ふは舟に米俵を積むの図也〔割註・略〕民間に売る者は七福神或は宝尽等を画く〔割註・略〕京坂は近世廃衰す江戸は今も専ら元日二日の宵に小民売之巡る宝船の印紙に道中双六の印紙を兼売る其詞曰道中双六おたからおたから今夜の夢を初夢と云故に吉夢を見んと宝船をしくこと也

町中で、双六売りが振り売りした双六は、墨一色で刷られた安価なものであったようだが、何枚もの色版を重ねた錦絵の豪華な双六は、美しい袋に入れられ、初春の絵草紙屋の店頭を飾った。江戸では、出版物の多くは正月に新版として出されており、これらさまざまな版本とともに、華やかな年始の景物として、町行く人々の目をひいたことであろう。

私が幼少のころ、お正月は必ず母方の祖母の家に親戚一同が集まり、みんなで一年の始まりを祝うのが通例であった。私には6人の叔父・叔母がおり、それぞれに子供がいたので、いとこは全部で10名をこえていた。年が近いいとこ同士で、百人一首や福笑いなどに、夜遅くまで興じていたことも、今は懐かしい思い出となっている。江戸時代にすでに正月の遊戯として親しまれていた双六は、明治・大正と時代が移りかわるなかでも、やはり子供たちのお正月の楽しみとして命脈を保ち、ついこの間、昭和の時代まで当たり前のように日本のお正月の風物として常にあったように思う。旅や人生をいわばバーチャルに体験できる双六という遊びの本質は、現在ではＲＰＧ（ロールプレイングゲーム）などのゲームソフトに引き継がれてはいるが、かつてのように、大勢が集まって、ひとつの遊戯盤を取り囲み、時間を共有しながら共に遊ぶという光景が見られることは稀（まれ）になってしまった。それでも最近は、昭和30年代への回帰ブームで、人生ゲームなどのレトロなゲームも復権の兆しが見られるようだ。双六も、大きな玩具店に行くと、広重の東海道中双六などが復刻版として販売されている（江戸博のミュージアムショップにもあります）。そんな双六がもし手に入ったら、このお正月、集まった親戚と賽を振ってみてはいかがだろう。もちろん「上がり」にはみかんを忘れずに置いておきましょう。

仁義五常振分雙六　国貞・国芳・広重の合作。
館蔵 97202384

第59回　江戸東京博物館友の会セミナー（2007/10/2）

「一画家から見た漱石の気になる生き方」

講師　喜多迅鷹（としたか）さん（画家）

漱石と徴兵との関係

私は特に漱石の専門家ではありませんが、漱石の大ファンで画家としてその足跡をたどりスケッチ紀行集を出したりしております。私には、漱石について未だに心にひっかかっている「気になること」が一つあります。それは漱石と徴兵制度の関係です。私自身、大日本帝国の最後の兵士の一人として学生時代に徴集された経験を持ちますが、漱石と徴兵制度についてはどうもあいまいにされているようなのです。

漱石の研究家小宮豊隆氏の書『夏目漱石』によると、漱石は明治25年(1892)に分家して北海道に移籍していますが、これはどう見ても徴兵免除を狙った措置で、当時文部大臣の認可を経た学校の学生は徴集を猶予されることになっていましたが、漱石は卒業により自然猶予が中断されるので当時まだ徴兵令が施行されていなかった北海道に籍を移したと思われます。この年から大正3年(1914)まで漱石の原籍は北海道にありましたが、漱石はそれまでもその後も一度も北海道を訪れたことはないのです。ところで、ここで小宮氏は「徴兵忌避」という言葉は使わず、「徴兵の関係から」というあいまいな表現にしています。

また、漱石自身もインタビュー中の雑談で、わが子の学校の先生との会話として徴兵忌避について一応触れていますが、それ以外では全く語っていません。この件については、漱石の周辺の友人や弟子たちも腫（は）れ物に触るように扱っていたようです。

ただ、徴兵忌避者をとりあげた小説『笹まくら』の著者・丸谷才一氏は、徴兵忌避者としての漱石について正面から書いています。このことが漱石の生涯を決定付けているのではないかとさえ述べています。しかしこれはむしろ例外で、漱石の徴兵忌避問題は、一般にはやはりぼんやりしたままです。

親友、子規とのやりとりが示すこと

このぼんやりした部分が、漱石の生き方と照らし合わせると、なぜぼんやりしたままなのか疑問が残るのです。彼の思想や信念は常に明快で、それは第一高等中学（後の旧制第一高等学校）時代からの大親友、正岡子規とのやりとりからもうかがわれます。子規と漱石は大親友として知られていますが、全く違う一面もありました。

正岡子規自身は結核を患っていましたが、日清戦争に自ら志願し新聞「日本」の従軍記者として意気揚々と中国に向かったりしています。一方、漱石は日清戦争をどう受け止めたのか、弟子たちも全く分らないと言っています。

正岡子規はスポーツが大好きで、特に野球好きでした。明治時代の一高の野球部で武士道野球を率先して行いました。子規の出身地、松山には、彼の生家を再現した「子規堂」の前に、子規の短歌「今やかの三つのベースに人満ちてそぞろに胸の打ち騒ぐかな」という碑が残されているほどです。野球・俳句・ナショナリズムが学生時代の子規です。

一方、その大親友の漱石は俳句については同調するものの、野球とナショナリズムについては　子規とは違っていました。それは、学生時代の子規への書簡からもうかがわれます。その中で、武士道にこだわる子規は、西郷隆盛など明治の豪傑たちの逸話集『明治豪傑譚』という書籍をとりあげ、英雄をたたえ「商工の子弟に意気地なし」と熱く書いて漱石に送るのです。漱石はそんな本を推薦する子規にあきれ驚き、その考えを貴族的と強く非難し、また「君何が故かかる貴族的の言語を吐くや君若しかく云わば　吾之に抗して工商の肩を持たんと欲す」と、長文の返事を書いているのです。

強い民主主義的信念と徴兵忌避

米国の民主主義を代表する詩人Whitmanを日本へ初めて紹介したのもまだ学生だった漱石です。Whitmanは「もし歴史を正しく見たならば、英雄豪傑はいらなくなるだろう」と述べているぐらいです。彼の影響を強くうけた漱石の根幹には先見的な民主主義的発想がありました。それは、後年の博士号拒否にもつながっているはずです。こうした発想をもつ彼にとって徴兵忌避という行動は決しておかしくはないのです。

漱石はまたその後『点頭録』の中でイギリスの当時の軍国主義を、「此の時代錯誤的精神が、自由と平和を愛する彼等に斯く多大の影響を与えた事を悲しむものである。」と批判もしています。

あらゆる言動に、自らの信念や社会に対する姿勢が一筋一貫して浮き上がってくるのに、徴兵問題についてあいまいになっているのはなぜなのか。そこには、忌避したという世間一般の後ろめたさというよりも、むしろ自分はもっときっぱりと行動するべきだったという強い反省があるのではないでしょうか。

漱石の一本筋の通った生き方と照らし合わせると、徴兵忌避こそがその出発点であるべきはずなのに、そこが自他ともにあいまいなままに流されていること、それが大変に気になるところなのです。

【記録】文・写真：広報部会・深尾恵美子

第60回 江戸東京博物館友の会セミナー（2007／10／8）

「時の鐘と江戸のくらし」

―時刻の取り方・報せ方―

講師 浦井祥子さん（日本女子大学非常勤講師・文学博士）

江戸の時刻

江戸の「時の鐘」は、昼夜6回ずつ一日12回つかれていました。つき方は、今の時報のように最初捨て鐘を3回つき、その後に刻の数をつきます。多い時には3+9で12回もつくことになり、一日にはかなりの回数となるため、撞木（しゅもく）といわれる木の部分は毎年交換しなければならなかったといいます。

時刻の定め方は、いわゆる不定時法で、日の出を「明け六つ」日の入りを「暮れ六つ」として一日を12に割り、昼夜の長さが季節によって変化するようにしたものです。日の出・日の入りの時刻は15日くらいごとに調整していました。日の長さの変化は、10日も経てば多少感じられるくらいでしょう。そうした意味で、江戸時代ではきちんと時刻の補正をして、鐘をつく時刻を決めていたのです。いつを日の出とするのかについては、黎明（れいめい）の頃に一本指を立て、その輪郭がくっきりと見えた瞬間とせよとの記録もあります。

「一刻を争う」という言葉がありますが、この「刻」は一日を等間隔に割る定時法で、一日を100区分したおよそ14.4分ということになります。また時が回るというのは明治以降に広く使われるようになった表現で、江戸時代には縦に動く尺時計なども多くありました。また、一定間隔を計るための香盤時計なども併用されていました。

時の鐘の設置時期と設置場所

写真は上野寛永寺の「時の鐘」で、現在も毎日3回つかれています。現在はこんもりした木々の中にありますが、江戸時代には周囲の木々は少なく、鐘楼も4本の柱が立てられているだけで、周囲に遮るものがない、小高い場所となっていました。浅草寺の「時の鐘」なども同様で、音の通りの非常によい場所を選んでいたことがわかります。

▲明治初期・上野寛永寺の「時の鐘」（社団法人霞山会館編『鹿鳴館秘蔵写真帳』（平凡社）より）

設置場所については、現在わかっているのは16ヵ所です。江戸に最初に作られた「時の鐘」は、通説によると寛永3年(1626)に本石町に作られたものと言われています。「時の鐘」としてはもっと古いものもあるようですが、本石町のものは、幕府が認可した最初の「時の鐘」であったと考えることができます。この鐘は、江戸城にあったものを移したという説もありますが、正確にはそのまま移設したのではなく、普段は「時の鐘」としての専用の梵鐘（ぼんしょう）を用いており、それが破損した時などに、江戸城西の丸のお蔵にしまってある鐘を借りる権利があったということのようです。本石町にかぎらず、江戸の「時の鐘」はすべて専用の梵鐘を用いており、寺院の儀式のための梵鐘とは別物でした。

幕府の管理

「時の鐘」は幕府に申請をして、許可されることによって設置できました。文書に残された申請の理由を、額面どおりに受け取ってよいかは難しいところですが、多く挙げられているのは、日雇い人の用便のためというものです。江戸の「時の鐘」は本石町・寛永寺・芝切通し・浅草寺・市ヶ谷八幡・目白不動尊・赤坂成満寺・本所横堀・四谷天龍寺の9ヵ所といわれることが多いのですが、これは天保年間あたりのことで、現在確認できる限り、最多時には10ヵ所に置かれていたようです。

幕府は、「時の鐘」の管理自体を、基本的には鐘つき人や、それに代わる寺社などに行わせていました。しかし、その設置許可や鐘つき人の選任などは、すべて幕府へ申請させ、統括という形で厳しく管理していたようです。特に鐘つき人は世襲制で、一人前になるには修業も必要なため、後見人を置く場合などもありましたが、その際も幕府の許可が必要でした。必要経費は、鐘つき銭としてお金で取っていたところや、檀家のお布施などで賄ったところなど、いろいろあったようです。

くらしの中で

本石町の「時の鐘」の由緒書によれば、最初江戸城内で鐘をついていたけれども、二代将軍秀忠の時に、うるさいということで中止され、太鼓に換えられたものの、それでは広く聞こえず、それまで鐘で時刻を知っていた石切場の人達が不便だと願い出たため、本石町に「時の鐘」を設置したといいます。

「時の鐘」のニーズには、①日雇い人のため、②寺社の法要のため、③庶民への功徳のため、などがあげられます。

江戸時代はゆとりのある時代と言われますが、「捨て鐘を一つは味に聞いている」（三つはうるさい）という川柳などを見ると、それなりに忙しさを感じる人々もいたようです。時の鐘は、当時の人々の生活の中に密接に関わっていました。時刻に同時性が必要になったのは、鉄道や電信が導入された明治以降のことです。少なくとも江戸では、10ヵ所の時の鐘が連動して鳴っており、現代と比較して、一概に時刻にルーズだったと言ってしまうことはできないのではないでしょうか。

【記録】文・写真：広報部会・林榮二

江戸東京博物館友の会特別観覧会
(2007/12/6)
「北 斎 ーヨーロッパを魅了した江戸の絵師ー」

北斎の里帰り作品、公開中

江戸博では特別展「北斎ーヨーロッパを魅了した江戸の絵師ー」が昨年12月4日から1月27日まで開催されています。12月6日には、友の会会員を対象とした「友の会特別観覧会」が開かれ、約140名の会員が集まりました。

はじめに、我妻直美学芸員による「見どころ解説」がありました。当時、外国との唯一のつながりともいえる窓口は長崎出島にあり、北斎はオランダ商館長が江戸へ出てくる度に依頼されて多くの肉筆画を描いたようです。商館長はオランダ帰国の際に、情報収集の一環として日本のものを数多く持ち帰りましたが、その中にこれら北斎の絵がありました。今回、オランダ国立民俗学博物館とフランス国立図書館のご好意により、すべての作品40点が初めて里帰りすることになり、こうして展示・公開することができたということでした。

我妻学芸員はスクリーンを使いながら、里帰りした作品の説明をしましたが、その詳細はここでは省きます。大きな見どころは、特に陰影や遠近法に北斎がこだわっていることを見て欲しい、ということ。それに、オランダ国立民俗学博物館所蔵の作品は和紙ではなく、オランダの洋紙に描かれているため絵具の発色が良くとてもきれいである、また、絵としては『花見』、『端午節句』、『節季の商家』というように風俗を描いたものが多い、ということ。一方、フランス国立図書館の方は『漆屋と蝋燭屋』、『今戸瓦窯』、『洗い張り』など働く人を描いたものが多いということです。

次に、北斎の多彩な芸術世界、ということで版画、肉筆画、屏風絵などの作品についてコメントがありました。ここでもその内容は省きますが、学芸員自身は『端午節句図』という肉筆画が大好きだそうです。微妙な陰影が丁寧に描かれており、金色のかぶとが光っていて、すごい！ とのことでした。

このあと企画展示室に移動して、数多くの作品を鑑賞しました。『富嶽三十六景』の一部しか見た覚えのない私にとって、よくもこれだけ多くのものを、ひとりの人間が描いたものだ、しかも、展示されているのはその一部だという驚き。そして、描いたものの幅広さ（人物画、風景画などの他、挿絵、漫画、玩具絵、一筆画、画本早引等々）、想像力の豊さ、構図の斬新さ、驚嘆の連続でした。1時間半ほどの鑑賞時間が瞬く間に過ぎ去ってしまいました。

このように今回の特別展は「知らなかった北斎」と「知っている北斎」を同時に見られる近年まれな展覧会といえるでしょう。絵画に興味のある人は勿論、ない人でも江戸時代に関心のある人ならば、一見の価値があると感じ入った次第です。

【取材】文・写真：広報部会・福島信一

江戸博クリップ

ちびた眉墨

司書　井上美奈子

私の化粧台の上には、使いかけの眉墨が置いてあります。

それは20年前に亡くなった祖母のものです。

祖母は明治生まれ。「生き字引」という言葉がありますが、まさにその通り。働きながら良く本を読み、見聞きしたことなども驚くほどよく記憶していて、子どもの頃の私は祖母がしらないことはないのではないかと思っていました。

当然、関東大震災や戦争も経験していますが、それについて話すことはあまりありませんでした。気丈な祖母が語らないのだから、よほど辛い体験だったのかもしれません。

お世辞にも「優しいおばあちゃん」ではなく、礼を失すれば容赦なくゲンコツが飛び、それは近所の子どもや大人に対しても同様でした。今でも「怖かった」と、幼馴染み達から親しみをこめて言われます。

酒・タバコを好み、花札・パチンコを嗜み、お洒落を愛した祖母。毎日きっちりと化粧をし、最後に丁寧に眉を引くのです。

そんなある日、母が私に笑って言いました。

「おばあちゃんの眉毛おかしいね」

自分の眉毛のはるか上に眉墨を引いています。まるで眉毛が二つあるように。みんなで大笑いをし、その日から祖母の眉毛を引くのは私の仕事になったのです。

祖母がなくなったのは、それから間もなくでした。

お洒落な祖母は着物や宝石類も残しましたが、私にとってはそのなんでもない眉墨が、大切な形見となっています。

◆このコラムは江戸博の学芸員や司書など館職員の方に執筆をお願いしています。

江戸東京博物館友の会　見学会（2007/10/13）

水戸徳川家ゆかりの地を探訪

（水戸徳川家見学・バスツアー）

▲好文亭からの眺望

まず光圀の隠居所・西山荘へ

10月13日(土)薄曇。肌寒い朝8時江戸博をバス2台でスタート。車中で岩松氏作成の資料を読み、玉木会長より当日の探訪地についての丁寧な説明を受け、知識を得て西山荘に到着しました。参加者97名は3班に分かれ、それぞれ案内人の説明で西山荘を見学。

西山荘は水戸の北20㎞、常陸太田にあり、徳川光圀卿が隠居されたところです。光圀卿は元禄3年(1690)家督を三代綱条に譲り、江戸城を後に水戸に帰り、このとき権中納言に任じられました。中納言を唐名では黄門といったので、以後黄門様と呼ばれるようになりました。光圀卿は元禄13年(1700)、73歳で亡くなるまで、ここで過ごしました。

山荘の入り口のくぬぎ門の「下馬」の立て札は、「どんな人でもここからは駕籠(かご)・馬から下りて歩け」という意味で、彼の分け隔てない人柄がうかがえます。また通用門のほうが表門より立派なことからもその人柄がしのばれます。

山荘は歴代藩主により守られてきましたが、文化14年(1817)に焼失しました。それから2年後に八代藩主斉脩公により規模を縮小して再建されました。それが現在の建物です。

案内の方によると、「黄門様はテレビのように諸国を漫遊していません。実像の助さん格さんは光圀卿が『大日本史』を編さんしたとき仕えた史臣(歴史を編さんした人々）の中の総裁になった方々です。史臣たちは全国各地に史料を求めて旅をしました。これが後に「水戸黄門漫遊記」と脚色されたのでしょう。助さんは佐々十竹(介三郎宗淳・1640～1698)、格さんは安積澹白(覚兵衛・1656～1737)です」とのこと。

▲西山荘でグループに分かれて見学

偕楽園、好文亭と常磐神社

西山荘から水戸まで戻り、水戸ドライブイン（ひたちの里）で昼食し、水戸偕楽園へ向かいました。偕楽園は天保13年(1842)に水戸藩九代藩主徳川斉昭公が自ら造園計画の構想を練り創設されたもので、特に好文亭については自らその位置や建築意匠を定めたといわれています。この偕楽園の名称は、中国の古典『孟子』の「古(いにしえ)の人は民と偕(とも)に楽しむ、故能(よ)く楽しむなり」という一節からとったものです。偕楽園は単に美しい庭園を楽しむという目的でなく、藩校弘道館の付属施設の性格を持ち、修行の余暇の休養の場であると考えられ、文教政策の一環をなすものでした。園内には好文亭、吐玉泉、梅林などがあります。

好文亭の名前は梅の異名「好文木」に由来してつけられました。2層3階の好文亭は北にある奥御殿とうぐいす張りの太鼓橋で結ばれ、一般にはこれらを総称して好文亭と呼んでいます。3階を楽寿楼（藩主の御座の間）と呼び、前面に千波山があり、眼下に見える眺望はすばらしいものです。昭和20年(1945)戦火により焼失しましたが、同30年(1955)から3年の年月を使って復元されました。吐玉泉は表門と好文亭の間にある杉木立の熊笹の道を折れて階段を下りたところにあり、大理石の井筒の間から水がこんこんと湧き出ています。昔、好文亭の茶会にはこの水が使われたそうです。

常盤神社は偕楽園の東門に隣接する由緒ある神社です。明治初期、水戸藩二代藩主徳川光圀と九代藩主徳川斉昭の徳を慕う旧士族によって祠堂が建立されたのが始まりです。境内には昭和34年(1959)に建て替えられた社殿を始め、能舞台や大砲、三木神社、東湖神社などがあります。

特別史跡の弘道館

15時15分、弘道館に到着。弘道館は水戸藩の藩校として九代藩主斉昭により天保12年(1841)8月に創設されました。その敷地は17万8400㎡と大規模でした。藩士に文武両道の修練をつませようと、武芸一般はもとより医学、薬学、天文学、蘭医学など幅広い学問を取り入れた、いわば総合大学ともいうべきもので、当時の藩校としては国内最大規模のものでした。十五代将軍徳川慶喜も父斉昭の厳しい教育方針で5歳のときからここで英才教育を受けました。慶応3年(1867)の大政奉還の後、謹慎した至善堂が現在もあります。ここは特別史跡になっていて、正庁は藩主が臨席して行われる、文武の大試験、その他の儀式に用いられた第一の場所でした。至善堂は正庁と廊下で続き、畳廊下を通って奥に入ると藩主の休息所があり、諸公の勉学所があります。

館の係りの人に「本来は弘道館を見学してから偕楽園へ行くほうが筋道です」といわれました。勉強してから遊びなさいということのようです。16時過ぎ弘道館を後に18時30分頃江戸博に帰着。天候に恵まれ、とても楽しく充実した一日でした。

【報告】文・写真：会員・藤村一夫

江戸東京博物館友の会　見学会（2007/10/21）

江戸城周辺の探訪 ―その2

（内濠をめぐる）

▲桜田門に入る参加者たち

千鳥ヶ淵から半蔵門へ

10月21日(日)正午過ぎ、目にしみるような青空の下、九段下昭和館前に200人近い友の会会員が大集合しました。今回は、江戸城内濠（うちぼり）の周辺に残る史跡を探訪し、260年間のゆるぎなき幕藩体制を作り上げた幕府の居城、江戸城の壮大さを再確認するとともに、東京一の美しい歴史的景観を楽しもうという見学会です。

20人ほどの小グループに分かれて、順次出発。まず目に映ったのは、青空を背にしてそびえる常燈明台。道路拡張工事の際、靖国神社前から現位置に移されたもの。九段坂を歩いて行くと、左奥に北の丸公園の入り口になっている田安門が見えます。現存する数少ない幕府時代の建造物の一つです。

靖国通りと別れ、桜の並木道を進むと、左前方の眼下には千鳥ヶ淵の美しい光景が広がります。歩道に植えられた直径70㎝以上もありそうな桜の幹からは、大きな枝がうねりながら濠の水面に向かって広がっています。ほどなく戦没者墓苑に着きました。35万人の御霊が、千鳥ヶ淵の桜に守られ永久の眠りについています。祭壇の前に立ち、祈りをささげていると、どこからともなく尺八とフルートの柔らかな調べが聞こえてきました。時折苑内で練習しているとのこと。

代官通りを越えて千鳥ヶ淵公園に入ると、ジョギング大会が行なわれていて、スタートを待つランナーたちでごった返していました。左眼下の崖のような急こう配の奥には江戸城の濠の中で最も深い半蔵濠が見えます。右手には英国大使館があります。

▲千鳥ヶ淵を眼下に見ながら歩く

桜田門から皇居前広場へ

左奥に半蔵門を見ながら進むと、都心のビル街を背にした桜田濠の壮大な景観が眼に飛び込んできました。自然の地形を利用した深く広大な濠は深緑の水をたたえ、急こう配の土塁は芝で覆われ、その上部は鉢巻土居と呼ばれる低層の石垣が続いています。

彦根藩井伊家上屋敷跡に建つ憲政会館を右手に見ながら、三宅坂を下っていくと、桜田門があります。その間300ｍ位で、そのわずかな距離の間で、井伊大老が暗殺されてしまったことを思うと、井伊家と元水戸藩士たちの危機意識の格差を考えさせられます。

桜田門を通り抜けて、西の丸下に向かいます。約2,000本の黒松が点在する大芝生広場（皇居前広場）は、開放的だが荘厳な雰囲気も漂います。本丸登城の際の玄関である桔梗門（ききょう）や西の丸大手門にも近いこの一帯には幕府重役の屋敷が並んでいたといいます。この地に繰り広げられた歴史の変遷と重みを感じつつ、整然と敷き詰められた玉砂利を踏みしめながら歩きました。

二重橋濠沿いに進んで行くと、坂下門前に出ます。門前に屋敷を与えられていた老中安藤信正の暗殺未遂事件は有名です。坂下門から蛤濠（はまぐり）沿いに曲がると桔梗門。桔梗門から内堀通りに向かうと、巽櫓の白壁と澄み切った青空、桔梗濠の水面に小さな白いさざ波となって映る巽櫓（たつみやぐら）とが一幅の絵となる美しい景観です。

大手門は江戸城の正門で、登城の際は徒歩で入城しなければならなかったのですが、例外として50歳以上で許可が出ていれば、大名でなくても駕籠（かご）で通ることができたといいます。江戸時代にも、高齢者に優しいマニュアルがあったのですね。

将門の首塚に寄り出発点にもどる

大手濠に沿って歩いていると、突然地下からゴーゴーという音が響いてきました。東西線の騒音で、随分浅い所を走っているものだと驚きました。

平将門の首塚に立ち寄った後、再び大手濠沿いに進みます。気象庁から丸紅あたりが一ツ橋家屋敷跡ですが、小さな標識が立っているだけで往時をしのばせるものは何もありません。

平川門は、門自体は関東大震災後に再建されたものです。脇にある不浄門は死者や罪人が城外に出される際に利用され、赤穂城主浅野長距、大奥年寄絵島など悲しいエピソードにこと欠きません。平川橋の欄干を飾る擬宝珠（ぎぼうし）は、城内各所から集められたもので、最も古いものは慶長19年(1614)の刻銘があります。

竹橋の手前を右折して清水濠沿いに歩くと、左奥に清水門が見えます。明暦の大火(1657年)後に再建された門が数回の修理復元を経て今日に至っています。今回の探訪会の最後の見学場所は蕃所調査所跡碑で、出発点・昭和館の横です。

こうして、私たちは、260年の平和で日本独自の文化が花開いた江戸時代の象徴・江戸城の偉大さを再認識するとともに、内濠一周5㎞のウォーキングコースを完歩した後の心地よい疲れを感じたのでした。

【報告】文・写真：会員・高澤美恵子

江戸東京博物館友の会　見学会（2007/11/18）

深川の史跡 ―その1

今回の見学会は「深川の史跡　―その1」として、深川の北部にあたる深川発祥の地である森下、高橋、清澄、白河を中心に約2時間、かなり細かく探訪しました。

当日は素晴らしい気候に恵まれ、約80名が参加されました。

深川発祥の地―森下、高橋

出発は森下町。深川発祥の地であり、歴史ある町です。まず森下の交差点角に祭られた纏を見て、さすが下町と感じました。次に深川の開拓者、深川八郎右衛門の祠である深川神明宮へ。この神社前では伊東深水（美人画家）の誕生の地であるとの説明があり境内へ。参道には町内の神輿蔵が並び、銀杏の葉が黄葉して素晴らしい光景でした。庚申塔がわずか隅に残されていました。

▲伊藤深水の誕生の地についての説明を聞く

芭蕉の住居地と隅田川

さらに次は、この界隈を歩くには外せない隅田川へ。新大橋の端から芭蕉記念館までを隅田川のほとりを歩きました。一時期隅田川は悪臭で寄り付けませんでしたが、今は奇麗になり遊覧船が行き交い活気が戻ってきました。遊覧船から手を振られ、つい我々も手を振りかえしました。

前は清洲橋、後ろは新大橋と好天も手伝って、大パノラマを見ているようでした。そして松尾芭蕉が住んでいたとされる所、芭蕉記念館、芭蕉庵史跡展望庭園、芭蕉稲荷神社と回りました。実住居地は不明ですが、この辺に住んでいたのは事実です。このそばの万年橋は江戸時代大変な絶景地で北斎・広重の絵でも有名な所です。確かに今でも万年橋から清洲橋方面を望むと素晴らしい光景です。

▲芭蕉稲荷前での説明

幕府が物資の調達のために小名木川をつくり、重要な交通である船の水路として、また千葉・茨城方面の街道として大変栄えた所です。この川のほとりはさくら並木ですが、その落ち葉の上をさくさくと音を立てながら散策しましたが、深まる秋の感触を味わうことができました。そして高橋から白河町へ向かいました。白河町は当時の白河藩の屋敷があったことから名づけられた町名です。取引き市場としては最も古い干鰯場跡が現在の白河小学校にあったようです。

松平定信の墓：霊巌寺

次に当時の豪商、紀伊国屋文左衛門の墓を格子越しに見て、最後の見学場所霊巌寺へと向かいました。その途中、餅つきが賑やかに行われており、お年寄りから子供まで、家族総出の下町らしい光景でした。町並みの街灯や公衆トイレまでも古風になっているのが楽しく、郷愁を漂わせていました。

霊巌寺のさくら、銀杏の黄葉が真っ盛りでした。ここには江戸末期の財政、経済等の改革者、松平定信の墓があり、ほかに江戸六地蔵の一つがあります。

見学会の終わりに

ここではさらにグルメも紹介したいところですが割愛します。

江戸の名残が少なくなる今日ですが、今回の見学地はまだまだ多くの江戸を色濃く残している所で、大変有意義なひと時でした。今回紹介した他に深川江戸資料館、清澄公園等があります。江戸東京博物館にお越しの時少し足を伸ばしてみられてはいかがでしょうか。

▲霊巌寺境内にて

【取材】文･写真：広報部会・岡本静雄

活動に参加しよう

各部会員を募集！

事業部会＝友の会セミナーや見学会、古文書講座など、事業の企画から運営までを担当。**広報部会**＝会報『えど友』の編集・制作、ホームページ『えど友Web版』の制作・運営などを担当。**総務部会**＝友の会の運営全般、総会の運営、会報の発送、催事の受付などを担当。

普通はがきに希望部会、会員番号、氏名を明記して「友の会事務局」へご応募ください。

えど友プラザ

友の会
会員の投稿欄

〔特集〕江戸小説とその作家

長谷川伸さんのお墓

野坂紘子

御府内八十八ヵ所めぐりで目黒駅東口の四番札所高福院を訪れた。御本尊は船引き弁天。仏様もありがたく天井の竜も美しい。そしてここには長谷川伸さんのお墓がある。

姿の良いお墓で、うすい浮き彫りがひかえめにほどこされ、向かって右手に長谷川伸さんの名が、左に大姉と女の方3人の戒名がきざみこまれている。

ご縁と思って図書館の全集を開くと若いころは親しみやすい丸顔、年をとると立派なおひげの風格ある御老人だ。子供の頃小岩のドブ活で東映時代劇を見て育った私としてはやはり戯曲の「一本刀土俵入り」が良い。

しかし、意外と時代劇とイメージが違う。茂兵衛は17、8歳の若者と思っていたら、23、4歳。付け出しまではならなかったそうだ。お蔦(つた)さんは少なくとも30は過ぎと思っていたら、同じく23、4歳。

茶屋旅籠(はたご)の安孫子屋、二階の障子が開いて、酌婦お蔦ほろりと酔った顔を出す。きれいなはずだと思う。相撲取りからやくざになった駒形茂兵衛、お蔦との10年後の再会はあめ売りをしながら娘と暮らすボロ家だが、表に若木と老木の桜が咲く。

茂兵衛はめったらやたら強くってヤクザ10人くらいをまたたく間にやっつける。そして「仲よく丈夫でおくらしなさんせ。ああお蔦さん、棒っ切れを振り廻してする茂兵衛の、これが、10年前にくし、かんざし、きんちゃくぐるみ、意見をもらった姐さんに、せめて、みてもらう駒形の、しがねえ姿の、横綱の土俵入りでござんす」ああ、やっぱり泣ける。

▲長谷川伸の墓がある高福院　(写真：広報部会・松原良)

原稿を募集しています

会員の投稿欄「えど友プラザ」への原稿を募集しています。戦前戦後の思い出、名所めぐりの感想、趣味や所属サークルのできごと、あるいは東京や江戸に関することなどを1000字程度にまとめて事務局宛お送りください。採用分については記念品を差し上げます。なお、原稿はお返ししません。

特集「江戸小説とその作家」の原稿も引続き募集中です。皆様のご投稿をお待ちしています。

会議・会合日誌

2007/10～2007/11

◆役員会

10月10日(水)17時開催。事務職員不在の場合の会員からの問い合わせ電話の対応について、博物館側からの提案があり、友の会で留守電を購入することとした。機種等については担当者を決め検討することとした。出席者10名。

11月14日(水)17時開催。留守電について機種・費用など検討のうえ購入、11月1日より開設したとの報告があった。会員からの意見・要望について、新入会員が多くなったこともあり、すでに回答済みの質問でも、必要に応じ定期的に回答することとした。出席者8名。

◆事業部会

10月4日(木)17時開催。10月の事業確認と11月以降の事業計画及び担当者を決めた。見学会は同伴者を1名に制限したほうがいいのではないかとの意見があった。出席者14名。

11月1日(木)17時開催。セミナー・見学会について話し合った。また、参加者多数のセミナーの会場確保について意見を交換した。出席者12名。

◆広報部会

10月19日(金)13時開催。「えど友」40号の発行と校正について話し合った。また新春号(41号)の巻頭企画を決定した。会員募集のパンフレットの見直しをした。出席者00名。

11月16日(金)13時開催。『えど友』41号の入稿スケジュールを決定した。42号からの連載記事について意見交換した。出席者8名。

◆総務部会

10月31日(水)13時開催。『えど友』40号を発送した。「江戸博開館15周年記念」に贈呈する記念品及び事務局に設置する留守電について報告があった。出席者10名。

11月28日(水)13時開催。今後の活動について確認した。第2回「江戸文化歴史検定」の友の会申込みが確定したとの報告があった。出席者8名。

サークルだより

◎活動概況

◆**江戸・東京を巡る会**：11月9日(金)護国寺を訪ね本堂で詳しい説明をうかがったあと、江戸五色不動の一つ目白不動尊（金乗院）から怪談乳房榎ゆかりの南蔵院をめぐり、雑司が谷鬼子母神まで歩いた。参加者は19名。

◆**落語・講談を楽しむ会**：10月16日(火)江戸博会議室で1年間の総括、向う1年間の運営方針・活動計画について話合い決定した。参加者9名。11月25日（日）深川江戸資料館小劇場で開催された「楽笑会」(アマチュア落語家グループの発表会で、サークルメンバーの山内啓巳さんも出演）で落語を鑑賞した。参加者17名。

◆**藩史研究会**：10月5日(金)「下総佐倉藩」について有田欣也さんが研究発表。参加者19名。11月2日(金)8月の市川勝さんの「丹後田辺藩牧野家」研究発表を受け、その菩提寺・勝願寺（埼玉県鴻巣市）を訪ね、ご住職のていねいな説明を受けながら牧野家歴代の墓所を参拝した。参加者13名。

◆**古文書で『八丈実記』を読む会**：10月11日(木)、10月26日(金)、11月15日(木)、11月29日(木)に例会を開催。参加者は各10名、5名、10名、8名。

◆**江戸御府内八十八ヵ所をめぐる会**：第5回として10月25日(木)と10月28日(日)に「第79番専教院」(文京区小日向)など4ヵ所をめぐった。参加者は各17名、10名。また、第6回として11月29日(木)と12月2日(日)に「第48番禅定院」(中野区沼袋）など3ヵ所をめぐった。参加者は各23名、13名。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名をご記入の上、友の会事務局へお申込みください。また新しいサークルの立ち上げ希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先　〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局　Tel.03-3626-9910

催事案内

友の会セミナー

第64回「十八代当主が語る太田道灌」
講師　太田資暁さん

◆山吹伝説で知られる太田道灌が、江戸城を築いて今年で550年。葦(あし)と萱(かや)の生い茂る江戸の地が、今や世界有数の大都市となったこのロマン。なぜ道灌はこの地に城を築いたのでしょうか。また道灌は上司のために一生懸命働きながら、その上司に謀殺されるという悲劇に会っています。彼は後の世の江戸市民から大変愛されました。今でも関東各地にゆかりの寺社や、逸話が数多く残っています。十八代目の子孫の目から道灌像はどのように写るのでしょうか。エピソードを交えてお話をしていただきます。

○講師略歴：おおた・すけあき
昭和18年(1943)生まれ。早稲田大学商学部卒業。東京海上火災保険㈱専務取締役、東京海上日動あんしん生命社長を経て、現在、医療法人財団海上ビル診療所理事長。太田道灌公墓前祭実行委員会会長。東京都出身。

- 開催日：2月23日(土) 14:00～15:30
- 申込締切：2月12日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階学習室1、2
- 定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】清水良男(事業部会)

友の会特別観覧会

2008年NHK大河ドラマ特別展「天璋院篤姫展」

◆薩摩藩主島津家の一門に生まれ、ペリー来航にゆれる幕末の動乱期、21歳で徳川十三代将軍家定に嫁いだ篤姫。夫の急死後、若き十四代家茂の養母として、その妻和宮とともに江戸城大奥をとりまとめます。やがて訪れた戊辰戦争時には、江戸城に迫る西郷隆盛ら新政府軍に働きかけ、江戸城の無血開城に大きな役割を果たしました。本展は篤姫と彼女をとりまく人々ゆかりの品、江戸城大奥の華麗な調度、幕末の動乱を伝える歴史史料などで構成され、篤姫の波乱に満ちた生涯をたどる特別展で、2008年NHK大河ドラマとも連動しています。担当の岡本純子学芸員による「見どころ解説」をお願いしてありますので、ご期待ください。

- 開催日：2月22日(金) 17:00～19:00
- 申込締切：2月12日(火)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール／企画展示室
  ※解説の会場は変わる場合があります。
- 定員：100名　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

古文書講座

第3期の残日程

古文書講座の今年度第3期の残日程は次のとおりです。新規申込の受付はいたしませんのでご了承ください。なお、来年度については多数の受講希望者が予想されるため引き続き対策を検討中です。

◆**入門編**［講師：小松賢司さん（学習院大学大学院史学専攻）］
1月9日(水)、2月6日(水)、3月5日(水)
いずれも 14:00～16:00、江戸博1階会議室

◆**初級編**［講師：長坂良宏さん（学習院大学大学院史学専攻）］
1月16日(水)、2月20日(水)、3月19日(水)
いずれも 14:00～16:00、江戸博1階会議室

◆**中級編**［講師：小宮山敏和さん（徳川林政史研究所）］
1月19日(土)、2月16日(土)、3月15日(土)
いずれも 14:00～16:00、江戸博1階学習室1、2

【企画担当責任者】上田太一（事業部会）

お申込方法

◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。**「往復はがき」の必要はありません。**
なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。
◆締切：各催事の案内をご覧ください。
◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
◆申込先：**〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1**
江戸東京博物館友の会事務局

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊いずれも申込多数の場合は抽選となることがあります。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更のご連絡などはなるべく事務局員出勤の水曜日か金曜日（10時～12時、13時～17時）にお願いいたします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

訂　正

- 前号催事案内の第63回セミナー「江戸300藩殿様のその後」の講師のお名前に誤りがありました。正しくは中山良昭先生です。訂正いたします。
- 前号「えど友プラザ」御投稿の大松友紀さんのお名前は大松友紀子さんの誤りでした。訂正いたします。
- 前号目次「幕末の……体制委任論」は「大政委任論」の誤りでした。訂正いたします。

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●特別展　北斎
－ヨーロッパを魅了した江戸の絵師－

会　期　2007年12月4日(火)～
2008年1月27日(日)
休館日：12月28日～1月1日
※1月2日(水) 3日(木)は午前11時から開館
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円

次回予告

●特別展　2008年
NHK大河ドラマ特別展「天璋院篤姫展」

会　期　2008年2月19日(火)～4月6日(日)
休館日：月曜日
会　員：一般600円、65歳以上300円、大・専門生480円
同伴者：一般960円、65歳以上480円、大・専門生760円

企画展と特集展のご案内

●企画展　北斎漫画展

同時開催　北斎諸国名橋奇覧、諸国瀧廻り復刻版画展
開催期間　2008年1月2日(水)～2月11日(月・祝)
会　　場　5階常設展示室内　第2企画展示室

●特集展　「家康・吉宗・家達（いえさと）～転換期の徳川家～」

開催期間　2008年2月5日(火)～3月23日(日)
会　　場　6階常設展示室

●次回企画展　川瀬巴水展

開催期間　2008年2月19日(火)～4月6日(日)
会　　場　5階常設展示室内　第2企画展示室

お◆知◆ら◆せ

事務局に留守番電話を開設しました。メッセージの内容は次の通りです。

●水・金曜日　事務局員離席中のメッセージ
●水・金曜日以外　事務局業務日、時間の案内と、セミナー、古文書講座、見学会、特別観覧会の欠席連絡受付
●見学会当日の雨天に備えたメッセージ

会報＜えど友＞第41号
平成20年1月1日発行（隔月奇数月1日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：大石憲一（副会長）
編集人：松原良、菅沼和男、岡橋園子、佐藤幸彦、大野晴美、稲垣武志、岡田守弘、岡本静雄、林榮二、深尾恵美子、福島信一
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1　電話03-3626-9910